



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

© 0088-82 (無料) または 0120-0088-82 (無料) [受付時間] 9:00~23:00 (年中無休) [インターネットホームページ] <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>



八丈島の特産、黄八丈。江戸時代は米の代わりにこの黄八丈を幕府に納めていた



流入の第一号、宇喜多秀家の墓。没年当初に建てられた墓石も残っている



八丈島浄土宗三カ寺のご住職。向かって右から、長楽寺第三十一世明林和義住職。宗福寺第三十五世源博道住職。善光寺第六世濱野文雄住職。宗福寺境内にて

浄土

1997/10月号 目次

巻頭特別企画 もの食う人々をめぐって	辺見 庸	8
表紙は語る	岡 克己	15
寺院紀行 東京八丈島 宗福寺・長楽寺・善光寺	真山 剛	16
日常仏教語		27
連載小説 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	28
御法語に聴く		38
いい加減にしろ		43
うまい野菜と料理の話	我田 大	44
若和尚のチョットいいはなし		51
仏教相談	大室了皓	52
新連載 ホットアングル	利根川 裕	56
Jフォーラム		61
事務局便り		68
編集後記		70

表紙題字＝浄土門主 中村康隆猥下
表紙撮影＝岡 克己
アートディレクション＝近藤十四郎



飢餓の実感

一九九三年に、ソマリアに参りましたが、ちょうどその前年に、内戦で数十万人が餓死して、二〇〇万人くらいの難民が出るという風な状況で、わたしがソマリアの首都のモガディシオに着いたときも、主として子供ですが、バタバタと死んでいくような状況が見られたわけです。

そのときにわたくしは、飢餓という事について、初めて実感することが出来たんですけれども、例えば、子供が一週間まるまる水だけで過ごす、これは、殆ど回復不可能な状態になるわけです。結局、結核とか肺炎なんかを併発したりして、死んで行くわけですが、わたしは職業柄、そういう場面ですとか腐乱死体などに会える機会が多かったと思います。中でも十四歳の少女の死を目撃した体験が今でも忘れられません。

彼女は、肺炎か何かを併発していて、もうわたしが目の前を通り過ぎても、座ったままで瞬きもしないという状態でした。彼女の顔には、額といい頬といい、蠅がびっしりたかっています。彼女は、時々刻々と、まるでフィルムの早回しのように死へ向かっていきました。十四歳の彼女が、三十代になり、五十代になり、やがて老婆になっていく。唯ひとつ、凄いなあとと思ったのは、目がどんどん澄んでいくんですね。まるで、菩薩像のようになっているわけです。本当に、足もすくむぐらいの、美しさです。これは神仏の、死んで行く者に対する思し召しではないかとすら感じるわけです。

わたしは宗教者ではありませんが、唯、この光景だけは忘れられないんです。

その後東京に帰ったとき、東京の某チャンネルで大喰い競争というものをやっております。

して、それはもう、額から脂汗流して、苦悶の表情を浮かべながら喰っているわけです。

それがソマリアで見た、飢えに苦しんでいる人間の表情と非常に似ているんです。しかし、仔細に見ていきますと、目が違います。餓死していく人間の目はほとんど澄んでいくわけですが、飽食の中で、腹もはち切れんばかりに食べている人間の目は、どんどん濁っていくという風な感じを、わたしはその番組を見ていて感じました。

同時に、日本という国も相当飢えているなという風に思うわけです。心のどこかで飢餓という状況を設定してみるという風な、非常によれた豊かさ、精神の飢餓状況みたいなものが、はつきりあるような気がしてならないわけです。

ストリート・チルドレン

わたしが最初に行った国は、バングラデシュなんですが、ここはいわば世界でも最貧国の一つです。

皆様お気付きかどうかわかりませんが、報道メディアでは、命に値段がついているわけです。白人の値段は非常に高い。で、途上国の人間、色付きの人間達の値段というのは極めて安い。アフリカなんかで五十人ぐらいいっぺんに死んでも、記事にもならない。バングラデシュに大きな川がありまして、サイクロン、日本という台風ですが、サイクロンの季節になると百人二百人が一度に死んでしましますが、わたしがそのニュースを翻訳しても、殆どボツになります。ところが、ロスアンゼルス或いはニューヨークで、火災などで十人ぐらいの犠牲者が出れば、大ニュースになるわけです。ことほど左様に報道の世界から伝わるイメージというのは相当虚構のところがあふれています。



わたしは一度でもいいからもつと丁寧取材してみたいという風に思つて、バングラデ
イシュの首都のダッカに行つたわけです。

で、ここでスラムの子供達、ストリート・チルドレンと、一日行動を共にしたことある
んです。

彼らは毎日何をしてるかというところ、紙を集めてるわけですよ。落ちてゐる紙を集めて、
再生紙の工場に持って行つて、僅かばかりのお金を貰ひ、残飯を買つて生活してゐるわけ
ですよ。ダッカっていうところには残飯を売る屋台がありまして、わたしも食つたんですけ
れども。

ダッカには、炭坑のボタ山のように見える真つ黒なゴミの山がありまして、何かと思つ
て近付いてみますと、数千羽の鳥なんです。もつと近付いてみると何十頭もの野良犬が居
ます。もつと近づいてみると、二本足で歩行してゐるものが居る。それが子供達なんです。
この三者が押し合いへし合いするように



その時は実をいうと呆れたんですね。いまどきの日本の犬でも猫でも食べもしないような代物を貪り喰う。もし横から手でも出そうものなら、その手首を噛み切りそうな勢いで、食べてるわけですね。暗い中で目が青光りしているのがわかるんですね。それは、殆ど人の形相ではない、何か獣に近いものになっている。路上にぶちまけられた残飯を、四つん這いになって貪り喰うという、これまたわたしは一生忘れられない光景だという風に、思うわけです。

その時は、これは例外的な出来事であろうという風に思ったわけですが、ところがそこからわたしは足掛け三年世界を旅してわかったことですが、これはいい方なんです。たとえば残飯でもそれなりに流通しているなんていうのはまともな方でありまして、アフリカに行ったときは、残飯どころの騒ぎではない、ばたばたと人が死んでいく。数字から見ても、今地球には五十七億の人間が居ますけれども、そのうち六億から八億ぐらいは飢餓状態か、栄養不足か、三食まともに食えてないか、という風な状態にあるわけですから、ダ

人の齒形の付いたような食べ残しの鳥肉を、骨ごとバリバリ食ってしまうような子供達とは別の悲惨さの中に生きている。生きるということの切実感というものをまったく持たずに、殆ど生かされているというような気が、わたしはするわけです。

なにがいたいかというですね、唯単にものの大きさという指標だけでは見ることにできない時代に、わたくしは来ているような気がするわけがあります。世界というものを考えるとき、非常にそこが大きな問題ではないかという風に、思っています。

ビニールの皮膜

アフリカの話に戻りますけれども、ウガンダは一夫多妻の国なんですが、同時にカトリックの国でもあり、エイズが流行していても欧州からやって来た宣教師達はコンドームを使わせません。人がばたばた死んでいるにも関わらず、セックスに対しては禁欲的で、コンドームの使用を禁止させてしまう。ですからエイズがどんどん広まっています。

という風に、わたくしは、考えているわけなんです。

戦後五十数年の中で、これ程世界が見えるようになった時代はないという風にみんながいうわけですけども、わたしはビニールハウスが巨大になっただけであって、我々が肉体で、身体で感じる世界っていうのは、少なくなったような気がするわけです。

一見派手な、テレビでも新聞でも雑誌でも伝えられる、大きな派手な現象の蔭に、非常に大切なことが消えてしまったという感じがしてならないわけです。

わたしは若い頃は、世界に中心があると思っていたわけです。それはワシントンDCであつたりロンドンであつたり、或いは東京であつたりニューヨークであつたり、それがこの三年間の旅を終えてからですね、世界にはたくさん中心があるという風に思いあたったわけです。それは、例えば今喋ってる、ここが今のわたしにとって世界の中心であるという風な考え方になったわけです。世界というものを、地図の上で考える時代というのは終わったなあという風に思うんです。大きな現象の中に隠れている細部こそ、実は物事の本質の中心があるような感じがしてならないという風な感じが、する

表紙は語る

灯台

撮影●岡 克己

闇を照らす光

闇の夜

漆黒の荒涼たる海に
投げ出され揉まれつづける一隻がある
波の音、船体の軋み
すなわち長い航海の疲労と不安
が頂点に達するとき
遠く、微かに
一条の光が見える
驚愕
わき上がる希望
生かされていることへの歓喜
光は次第に太く強く眩い力となって
船を包み込み
確かな航路へと導く

灯台

長い歳月を越えて
聳え立つ塔

10月

めっ こ ば な

女子鼻灯台(愛媛県)

佐田岬半島の女子岬にある白色・

御法語に聴く

月かげのいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ（『黒谷上人語燈録（和語） 元亨版』五）

その救いの光に
気づかなければならない。

お十夜とお月さまよく仏の光

十月。今月から十一月にかけて多くの浄土宗寺院でお十夜じゅうやが催もよおされます。『無量寿経』の一節に由来するお十夜の行事は、明応四年（一

四九五年）に鎌倉にある浄土宗大本山光明寺に伝えられました。

お十夜は、元来、旧暦の十月五日から十四日にかけて十日十晩にわたってお念仏をお称えする法要です。夜を徹して行われたお勤めですから、お月さまにちな因よんで詠まれた歌が数多く伝えられています。

冴えそむる 鐘ぞ十夜の にわの月 杉風

お十夜を勤めているお寺の鐘の音とお月さまの光が、あたり一面に冴え渡っているさまを詠んだのがこの歌です。釣瓶つるべ落しの日暮れを迎えると、今のように電灯もない時代ですから、お月さまの光はとてもありがたいものでした。大気も澄みわたっていた

結願の 月冴え渡る 十夜かな 啞仏

十月が収穫の時期であるところから、お十夜には、一年間お護りをいただいた阿弥陀さまに感謝の新穀を供えます。そして、これをお粥かゆにして参詣人に食べていただくということから「十夜粥」という言葉も生まれました。老若男女を問わず賑わうお十夜には、そんな十夜粥にあずかろうとしてきた若者もいたかもしれません。こんな歌もあります。

月影に 若きも籠る 十夜かな 百萬

月影というと思い出すのが、浄土宗の宗祖、法然上人のお歌で宗歌にもなっている冒頭の月影の歌でしょう。

お月さまは、どんな場所もどんな人にも別け隔てなく照らしています。けれども、お月さまの光のおかげで夜も明るく過ごすことができるということに気付かなければ、お月さまに感謝することはできません。それと同じように、阿弥陀さまの限りない救いの光もすべての人を照らして下さっていますが、その救いの光に気付かなければ

薰香 線香 經典 念珠

浄土宗総本山知恩院御用達

豊田愛山堂老舗

※地方発送受賜ります。

京都・祇園

TEL(075)551-2221番(代)

FAX(075)525-1806番

誠を捧げる大切な法要なのです。

浄土宗にお十夜が伝えられてから五百年が過ぎました。お十夜の座に連なり、お念仏を称える人の顔はかわっても、五百年前も、今も、そして五百年後も、お月さまの光、阿弥陀さまの光はかわることなく照らして下さることでしょう。

一茶もお十夜にこんな歌を詠みました。

諸々の 愚者も月さす 十夜かな

